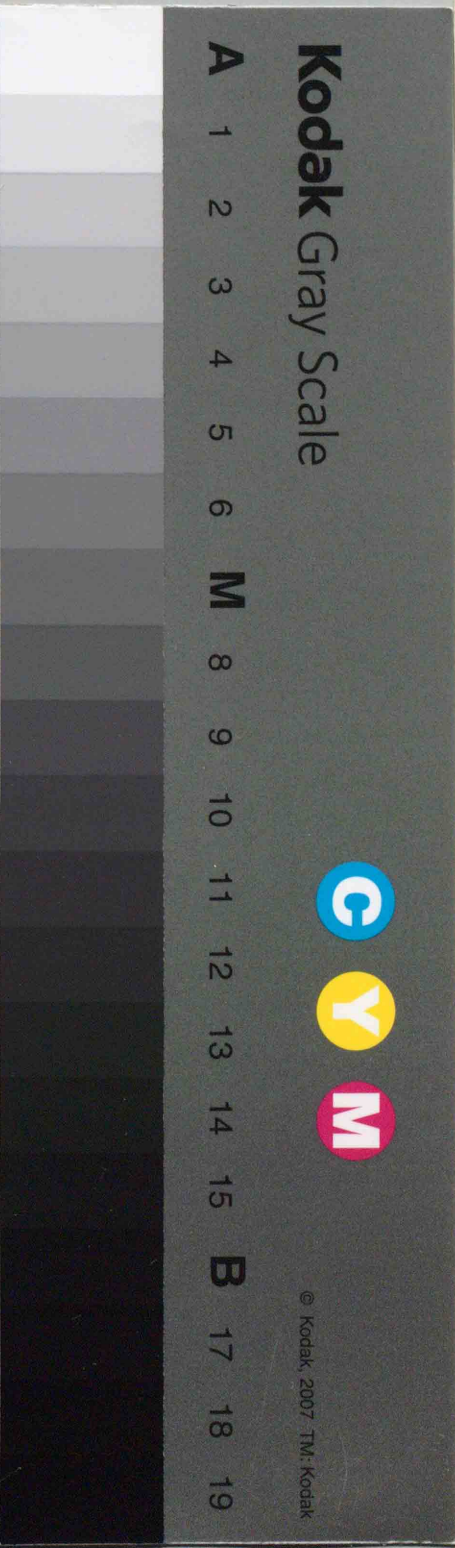
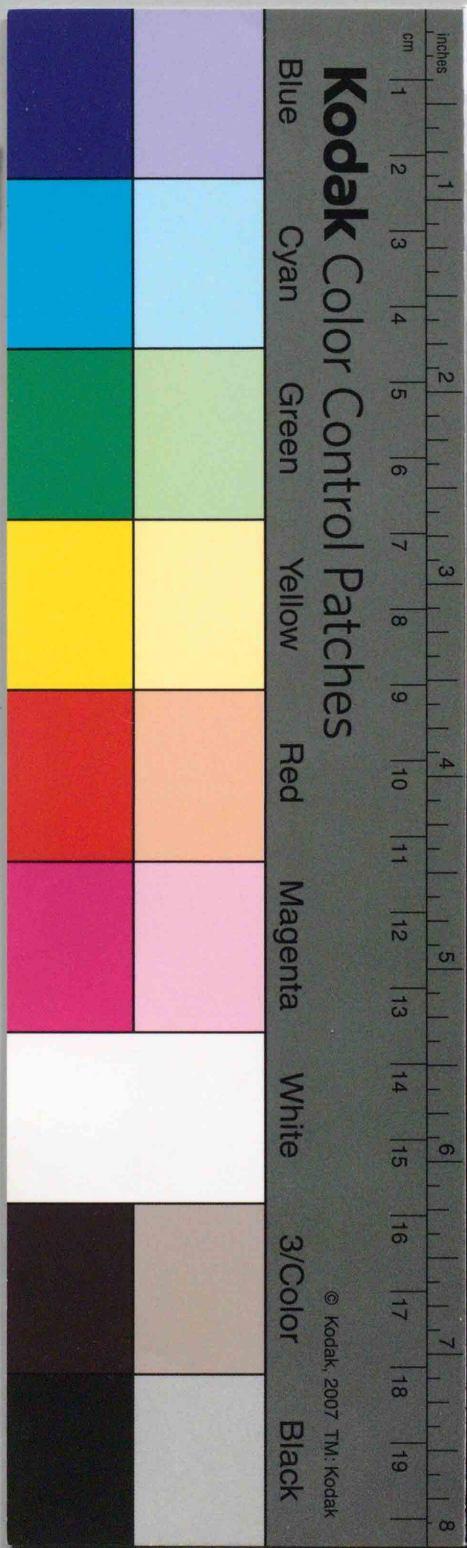
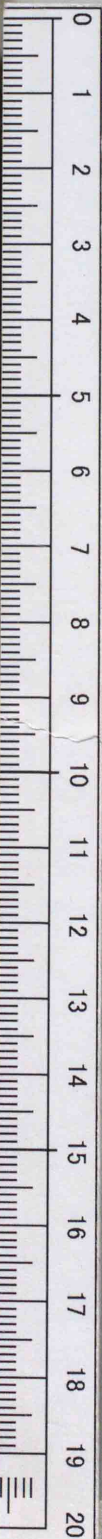




3059
M.14
資料室

たかみよ

やいばん



43127

教科書文庫

4
810
1942 33-1941
2000302320



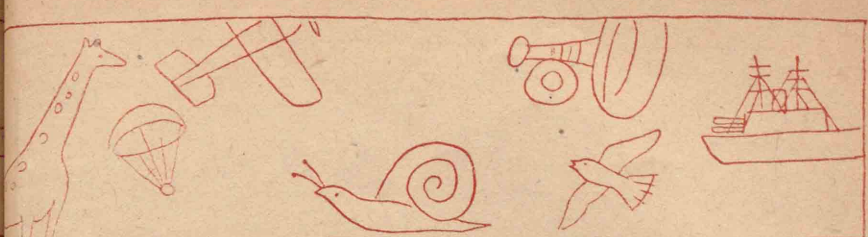
資料室

375.9
M014

よみかた



よみかた



もくろく

一	富士山	四
二	早鳥	六
三	海軍の いさん	十三
四	乗合自動車	十九
五	菊の花	二十六
六	かけっこ	二十八
七	かぐやひめ	三十二
八	たぬきの 腹つづみ	四十二
九	金の牛	四十四
十	満洲の冬	四十八
十一	鏡	五十三
十二	神だな	六十一

十三	新年	六十三
十四	いうびん	六十五
十五	にいさんの 入營	七十二
十六	雪の 日	七十七
十七	白鬼	八十
十八	たこあげ	八十八
十九	豆まき	九十四
二十	金しくんしゃう	九十八
二十一	病院の兵たいさん	百
二十二	支那の子ども	百四
二十三	おひな様	百十
二十四	北風と南風	百十二
二十五	羽衣	百十六



一 富士山

どこから見ても、いつ見ても、
富士のお山は美しい。

白いあふぎをさかさまに、
かけた下から雲がわき、

すそ引くはての松原に、

太平洋の波が立つ。



やさしいやうでををしくて、
たふといお山、神の山。

日本一のこの山を、
世界の人があふぎ見る。

二 早鳥

昔、あるところに、一本のくすの木が生えました。たいへんな勢で、ひるも夜も、ぐんぐんとのびていきました。

何年かたつうちに、このくすの木は、今まで見たことも聞いたこともないほど、大きな木になりました。

とうとうそのてっぺんは、空の雲にとどくやうになりました。大きな枝は、四方にひろがって、どこからどこまでつづいてあるのか、わからないほどになりました。

毎朝、日が出ると、この木の西がはは、何十といふ村々が、日かげになります。午後になると、東がはの何十といふ村々が、日かげになります。

「どうも困ったものだ。」

「お米が半分もできない。」

「なんとかならないものかなあ。」

あちらの村でもこちらの村でも、かういって、この大木を見あげました。

あるちゑのあるおぢいさんがいひました。

「しかたがない。この木を切ることにしよう。」
みんなはびっくりして、

「こんな大きな木を、切っていいものでせうか。」
といひますと、おぢいさんは、

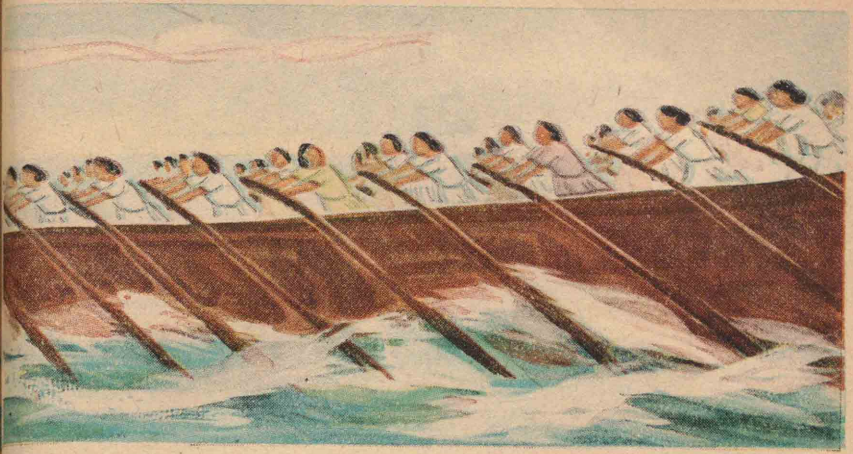
「でも、この木は、切るよりほかにみちがあるまい。」
といひました。

そこで、切ることになりました。

こんな大きな木のことですから、それはそれは、
大さわぎでした。何十人、何百人といふ木こりが、
長い間かかって、やっと切りたふすことができま
した。

こんどは、切りたふした木を、どうするかといふこ
とになりました。すると、あのちゑのあるおぢい
さんが、

「くりぬいて、舟を作るがよい。」



といひました。

そこで、大勢の大工を集めて、舟を作ることにになりました。何年かたって、とうとう一さうの舟ができあがりしました。海に浮かべてみると、今まで見たことも聞いたこともない、大きな舟でした。

大勢のせんどうが乗りこんで、

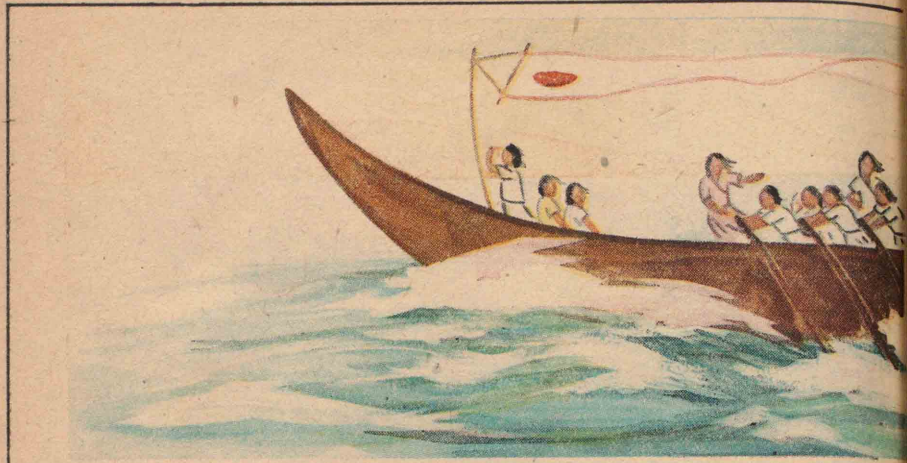
「えいや、えいや」とこぎました。

おどろいたのは、その舟の早いことです。かいをそろへて一かき水をかくと、舟は七つの大波を乗りきって、鳥のとぶやうに走ります。

「なんと、いふ早い舟だらう。」

「ふしぎだ、ふしぎだ。」

と、せんどうたちも、見てゐる人



人もいひました。すると、あのち急のあるおぢいさんが、

「いや、ふしぎでも何でも無い。あの勢のよいくすの木で、作った舟だ、勢のよいのがあたりまへさ。考へてみれば、このすばらしい舟になるために、あの木は、ぐんぐんのびたのかもしれない。鳥のやうに早い舟だから、早鳥といふ名をつけよう。」

といひました。

そののち、早鳥は、たくさんの米や、麥や、豆をつんで、都の方へたびたび通ひました。そのおかげで、日かげになって困つてゐた村々は、だんだんゆたかになつていったといふことです。

三 海軍のにいさん

ぼくが本を讀んでゐると、くつの音がして、だれかうちへはいつて來ました。出て見ると、海軍のにいさんでした。

にいさんは、にこにこしながらざしきへあがって、おとうさんに「ごあいさつを しました。うらの 畠にみた おかあさんも かけて来て、頭から手ぬぐひを取りながら、

「よくかへって 来ましたね。」

とうれしさうにおっしやいました。

にいさんは、前よりもずっと色が黒くなって、強さうに見えました。

おかあさんは お茶を入れて、

「ほんたうに しばらく でしたね。まあ、一つ おあがり。」

とおっしやいました。

ぼくはうれしくて、にいさんのまはりをとび歩きました。

にいさんは、

「勇、大きくなったね。いい子になった。」

といひました。

「ぼくも大きくなったら、海軍だよ、にいさん。」

といふと、

「それはいい。大ぢやう」

ぶなれるよ。」

と、にいさんはぼくの頭

をなでてくれました。



ぼくはうれしくてたまりません。にいさんのばうしをかぶると、おとうさんが、

「かはいらしい水兵さんだぞ。」

と、いって、お笑ひになりました。ばうしには、金で

字が書いてありました。

「大日本、その次は何と読むの、にいさん。」

「大日本帝國。」

「あ、わかった、大日本帝國海軍。」

「さうだ、よく讀めたね。」

にいさんといっしょに、おふるにはいりました。それから、みんなでごはんをいただきました。

にいさんは、しじゅうにこここしながら、軍かんやひかうきのおもしろい話を、いろいろとしてくれ

ました。いさんの乗ってある加賀は、かうくうぼかんで、たくさんのひかうきが、廣い かんぱんから勇ましくとんで行くさうです。

「軍かんといっても、加賀などは、動く ひかうぢやうのやうなものですよ。」
と、いさんはいひました。

おとうさんは、「ほう、ほう。」といひながら、かんしんして聞いていらつしゃいました。
ねる時には、ぼくはにいさんと並んでねました。

四 乗合自動車

きのふ 乗合自動車に 乗って、ホ町の ~~をば~~の
ところへ 行きました。松並木を 通りぬけると、たん
ぼでは、稲をさかんに かり取つて みました。

しばらく 行くと、牛の引いてある車をおひこし
ました。サ村の入口で、ルックサックをせおつた中
学校の 生徒さんが、二人 乗りこみました。

道が だんだんのぼりになって、自動車は 大きな

音をたてて、ぐんぐんのぼりま
した。兩がはから さし出た 木
の枝が、まどにとどきさうで
した。黄色や、赤い 木の葉で、
車の中が明かるいほどでした。
たうげに 来た時、生徒さんが、
「海が見える。」

と 大きなこゑで いひました。
山と 山との間に、海が光って
みました。

たうげをおりた ところで、ま
た止りました。そこで 女の 子
が一人 乗りました。外では、そ
の友だちが四人 並んで、「さや
うなら、さやうなら。」と いて、
手をふりました。

川へ 来ました。橋をわたら
うとすると、向かふからも 乗



合自動車が来ました。めいめい
左へよって、すれすれに通りま
した。うんてんしゅさんがおた
がひに手をあげて、元氣よくあ
いさつをしました。

ホ町に近いところで、どこか
のおばあさんが乗りました。ふ
ろしきつつみをさげて、あまし
たが、結びめから、小さな日の丸
の旗がのぞいて、あました。私
がわきへよって、席をあける
と、おばあさんは腰をかけたが
ら、

「ありがたう、ぼっちゃんはどう
こまで。」

とたづねました。

「ホ町のをばさんのところへ
行くのです。」



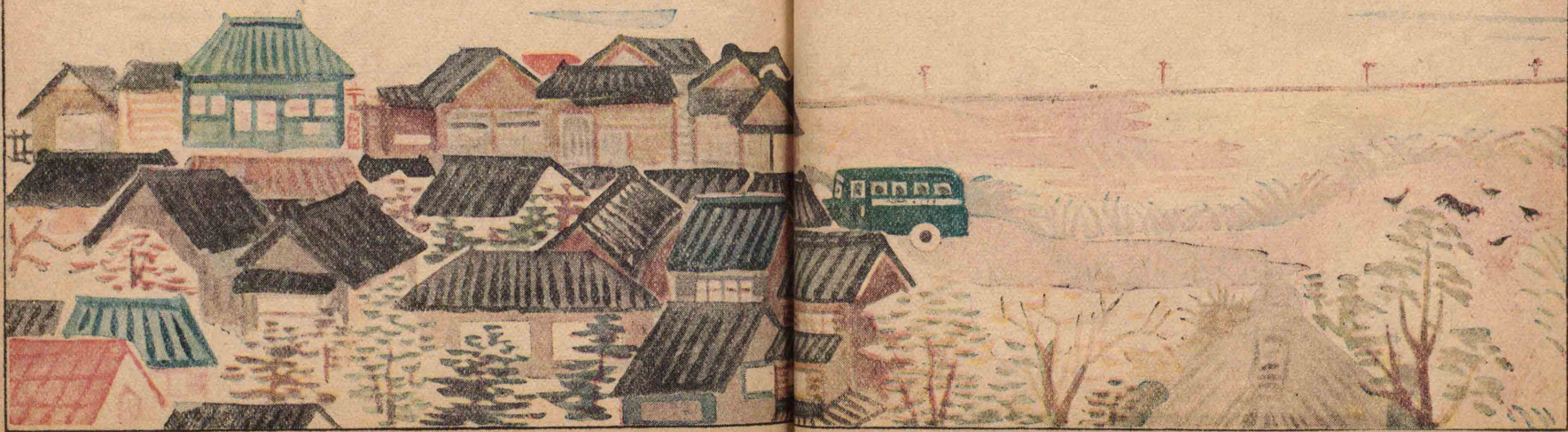
と答へますと、

「さうですか、わたしもホ町ま
で行きますよ。出征する孫
が、今日汽車で通りますので
ね、見送りに行くところな
んですよ。」

といひました。

道のまん中で、にはとりがた
くさん急さをひるってゐまし
たので、うんてんしゅさんが、「ブ
ウヅウ」と、ラツパをならしまし
た。にはとりは、おどろいて右
と左へ逃げました。

まもなくホ町にはいつて、い
うびんきよくの前で止りました。
をばさんのうちの三郎さんが、
私のおりるのを見つけて、笑ひ
ながら走って來ました。



五 菊の花

秋空高く

はれわたり、

菊の花咲く

明治節。

天皇陛下の

おちいさま、

明治のみかどを

あがめませう。

菊はたふとい

ごもんしゃう、

私たちの

すきな花。

天皇陛下の

おちいさま、

明治のみかどに

ささげませう。



六 かけっこ

一年生の旗取がすんで、いよいよ
ぼくたちのかけっこになりました。
ぼくたち七人は、白い線にそつ
て並びました。

「用意。」

と先生の聲。

「どん。」

聞くが早いかかけだしました。

そのうちに、二人がぼくを追ひこしました。

「負けるものか。」

ぼくは一生けんめいに走りました。

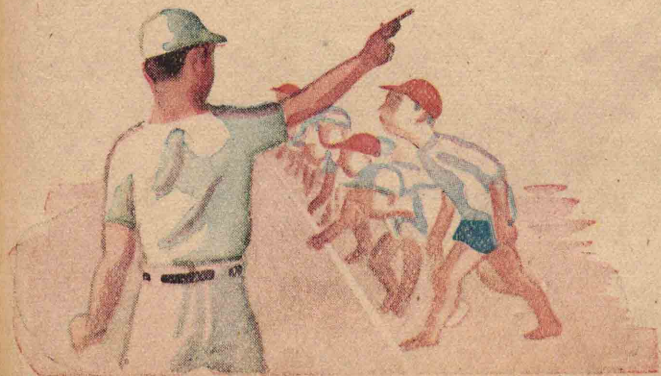
「早く、早く。」

「しっかり。」

おうゑんの聲も、ごちゃごちゃになつて聞えます。

もう何も見えません。ぼくはむ中で走りました。

すると、何かにつまづいてころびました。



「しまった。」
 と思ひながら、すぐはね起きました。が、もうみんなから、すっかりおくれてゐました。

「よさうか。」

と思ひました。しかし、おとうさんが、「負けてもよいから、しまひまで走れ。」と、おっしゃったのを思ひ出して、また一生けんめいに走りました。

「わあ。」

と手をたたいて、笑つてゐるものもあるやうでした。きまりがある。

いと思ひながら、ぼ

くは おしまひまで

走りつづけました。

すると、先生がにこ

にこして、

「太郎くん、えらいぞ。ころんでも、よくしまひまで走った。かんしん、かんしん。」

どいって、ほめてくださいました。



七 かぐやひめ

昔、竹取のおきなどいふおぢいさんがありまし
 た。毎日竹を切つ
 て来て、ざるやか
 ごとを作つてあま
 した。

ある日、根もと
 のたいそう光つ



てある竹を、一本見つけました。その竹を切つて、
 わつて見ますと、中に小さな女の子がゐました。
 おぢいさんは喜んで、その子を手のひらにのせ
 て、うちへかへりました。小さいので、かごの中へ入
 れて、おばあさんと二人で育てました。

この子を見つけてから、おぢいさんの切る竹に
 は、たびたび金がいってゐました。おぢいさんは、
 だんだんお金持になつていきました。

この子は、ずんずん大きくなりました。三月ほど

たつと、もう十七八ぐらゐの むすめに見えました。光るやうに美しいので、家の中も明かるいほどでした。おぢいさんは、この子にかぐやひめといふ名をつけました。

世間では、光るやうに美しい かぐやひめのことを聞いて、

「むすこの嫁にしたい。」

「いや、うちへもらひたい。」

などと、いふ人が、たくさんありました。何ごとにもすなほなかぐやひめでしたが、いつもおぢいさんに、「私は、どこへもまゐりたうございません。」と、いって、ことわって、もらひました。

かうしてゐる間に、何年かたちました。ある年の春のころから、月の出る晩になると、かぐやひめは月を眺めて、じつと考へこむやうになりました。

秋になつて、月がだんだん美しくなりました。八月の十五夜も近くなつたある夜、かぐやひめは聲をたてて泣きました。

おぢいさんやおばあさんは、大さわぎです。かぐやひめは、「なぜ泣くのか」と聞かれて、はじめはだまつてゐましたが、しまひに悲しさうに答へました。

「私は、もと、月の世界の、ものでございます。長い間おせわになりましたが、この十五夜には、月の世界から迎へにまゐりますので、かへらなければなりません。私は、お二人にお別れするのが、何よりも悲しうございます。」

このことをばを聞いて、おぢいさんもおばあさんもびっくりしました。

「それはたいへんなことだ。だが、迎へに來てもけつして、わたさないから、安心して、泣くことはおやめ。」

と、おぢいさんがいひました。

おぢいさんは、なんとかしてかぐやひめを引き止めたと思ひました。

おぢいさんは考へに考へたすゑ、このことをどのさまに申しました。すると、どのさまは、

「それは ざんねんであらう。よし、その 晩 けらい
たちを たくさん やつて、おまへの うちを 守らせ
る ことに しよう。」

とおつしやいました。

いよいよ 十五夜に なりました。おぢいさんの 家
の まはりを、弓矢を 持った とのさまの けらいたち
が、いくへにも とりかこみました。

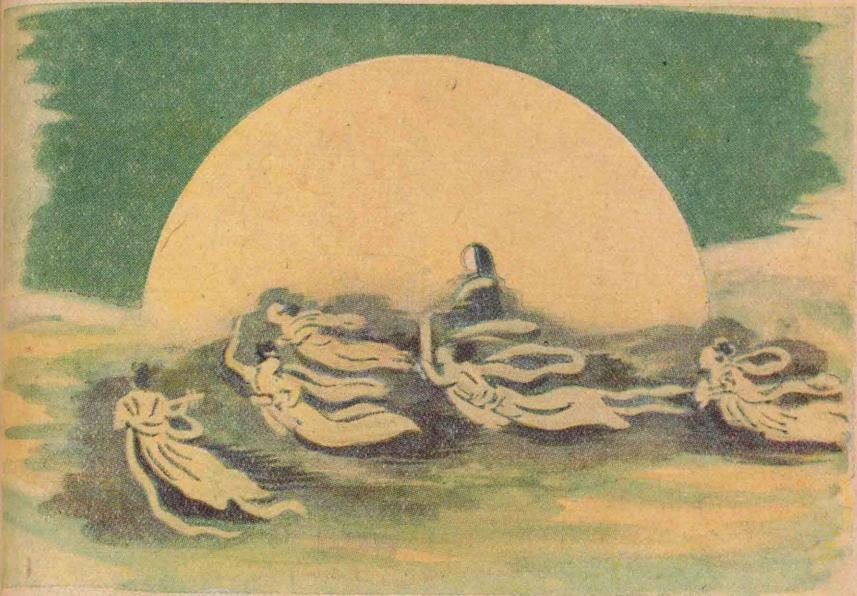
おばあさんは、しめきった 一間の中で、しつかりと
かぐやひめを だいて をります。おぢいさんは、その
入口に 立って 番を して をります。

夜中ごろに になると、急に お月さまが 十も 出たか
と思ふほど、あたりが 明かるく なりました。

「さあ、来たぞ。」

と、とのさまの けらいたちは、弓に 矢をつがへまし
たが、ふしぎに 手足の力が なくなつて、どうするこ
とも できませんでした。

その時、大勢の 天人が、雲に 乗つて おりて 來まし
た。すると、しめきった 一間の 戸が、ひとりであ



きました。おばあさんの手
に、しっかりとすがりつい
てゐたかぐやひめのから
だは、ひとりでに外へ出て
行きました。もう、だれの
力でも、なんともすること
ができませんでした。か
ぐやひめは、おぢいさんと
おばあさんに、

「とうとうお別れしなければならぬ時がまあり
ました。お二人のご恩は、けっして、忘れません。
どうぞ、月の夜には、私のことを思ひ出してくだ
さい。私も、あの月の世界から、お二人を拜んで
をりませう。」

と、いって、天人の用意して来た車に乗りま
した。かぐやひめを乗せた車は、大勢の天人にかこま
れながら、しづかに天へのぼって行きました。

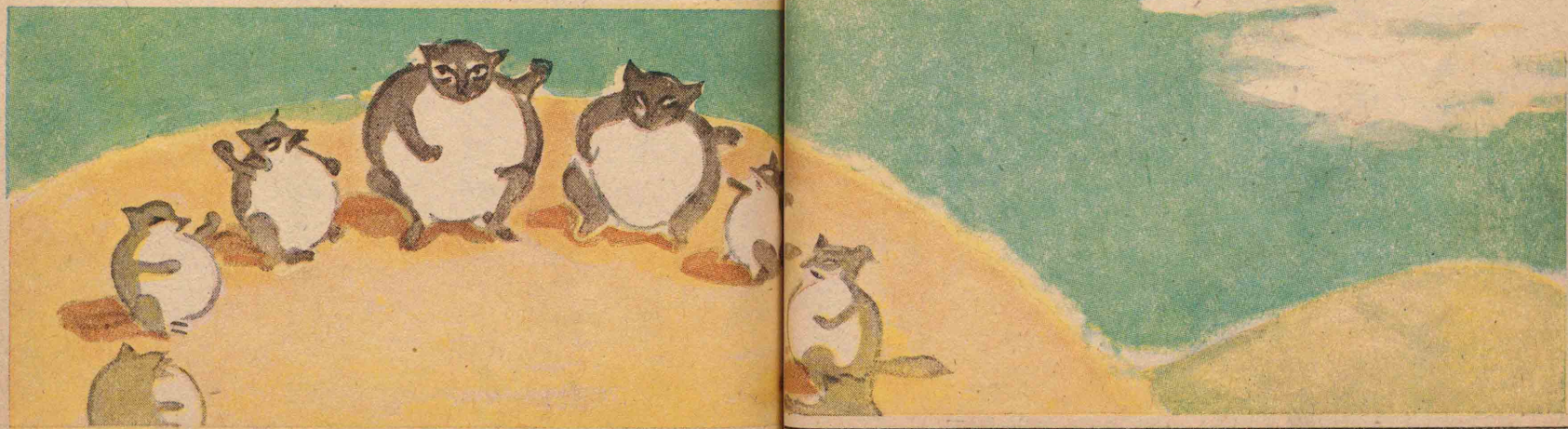
八 たぬきの腹つづみ

「さあ さあ、集れ、月が出た。
みんなで つづみの 打ちくらだ。
お山の上では 親だぬき、
ぽんぽこ あひづの 腹つづみ。

やぶの かげから 木かげから、
ぬっくり ぬっくり、子だぬきが、

出て 来て お山へ 集って、
ずらりと 並んで わになった。

空には まるい お月さま、
ぽっかり 浮かんだ 白い 雲。
月に うかれて 腹つづみ、
ぽんぽこ ぽんぽこ 打ちだした。



九 金の牛

これは満洲の話です。

海の中に、小さな島がありました。その島に、一匹の金の牛がゐました。

おなかがすいたので、草をたべようと思つて、あちらこちら歩きましたが、この島には、一本の草も生えてゐませんでした。

金の牛は、小高い岩の上にあがつて、四方を見わたしました。海の方かふに、もう一つ島が見えました。その島には、みどりの草が一めんに生えてゐました。

「なんとおいしさうな草だらう。一口たべたいなあ。」

と、金の牛は、ひとりごとをいひました。すると、ふしぎに今まですいてゐたおなかが、急にいっぱいになりました。

次の日も、金の牛は、岩の上にあがつて、みどり

の島を眺めました。やはり、おなかが いっぱいになつて、よい氣持になりました。

かうして、金の牛は、おなかがすくと、みどりの島を眺めては、おなかを いっぱいにしました。おかげで、金の牛は、おなかがすいて 困るといふことはありませんでした。

ところで、ある日のこと、金の牛は、ふとこんなことを考へました。

「ここから見るだけでも、おなかが いっぱいになるのだから、あの島の草をほんたうにたべたら、どんなにおいしいだらう。」

金の牛は、もう、じつとして、あられなく なりました。

いきなり海をめぐけて、どぶんととびこみました。金の牛は、自分のからだに金が あつたことを、すっかり忘れて、みたのです。そのまま海に沈んでしまいました。

十 満洲の冬

寒さのために、まどガラス一めん、まっ白にこぼつたのはきれいなものです。この氷のもやうは、どれ一つとして同じものがありません。人がかいても、こんなにきれいなにはかけないでせう。



白い菊の花が、咲きそろつたやうなものもあります。白くじゃくが、羽をいっば

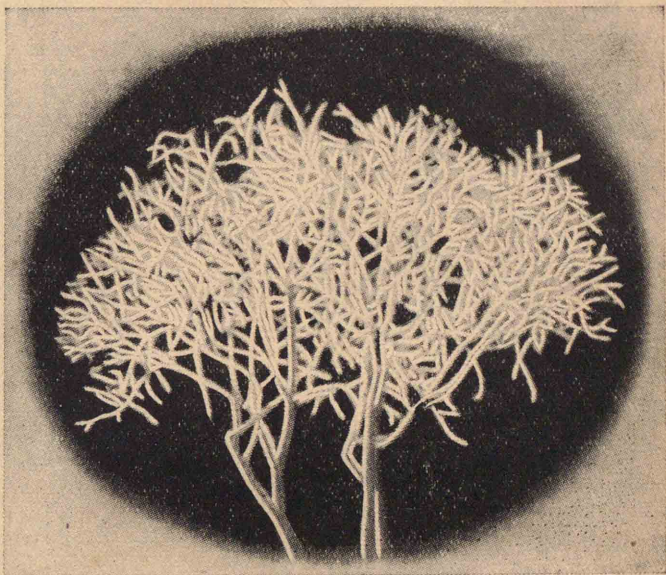
いにひろげたやうなものもあります。

星が並んで、光つてゐるやうなものもあります。

子どもたちは、この氷の上に、指で字を書いたり、人の顔をかいたりして遊びます。

晝になると、いつのまにか、ガラスの氷もすっかり消えますが、次の朝には、また新しいいちがったもやうが、美しくあらはれます。

ガラスの氷もきれいですが、じゅ氷といふのはもつときれいです。これは、木の枝といふ枝が、



すっかり氷に包まれて
しまふのです。ちやうど
水しやうで作った木の
やうです。

このじゆ氷に朝日が
さすと、きらきらと光つ
て、みごとなものです。

風が吹いて来ると、木の枝がふれあつて、からから
とかはいらしい音をたてます。

満洲に住んでゐる日本の

子どもたちは、いくら寒くても、元氣よくスケートをします。

さいしよは、スケートを
つけて氷の上に立つことも、
なかなかむづかしいので
すが、そのうちに一メートル、
五メートル、二十メートルと、だんだんうまくすべれる。



やうになるのです。のちには、すべりながらまがつたり、後向きにすべったり、友だちと手をつなぎあつたりして、思ふままにすべります。かうなると、おもしろくておもしろくてたまりません。

寒ければ寒いほど、子どもたちは喜びます。それは、寒いほど、スケート場の氷がかちかちになって、すべりよくなるからです。

満洲人の子どもは、木でこしらへたこまを、氷の上でまはして遊びます。細い棒の先にひもをつけて、そのひもでこまの腹をたたきます。すると、こまは勢よくぐんぐんまはります。ほつぺたをつめたい風に赤くしながら、む中になつてまはします。

十一 鏡

ねえさん

花子さんは、日のあたるところへ、小さな鏡を持って出ました。

鏡で日の光を受けると、きらきら光ります。花子さんは、その光を、二かいの窓のしゃうじにあててみました。すると、そのしゃうじをあけて、中からねえさんがのぞきました。花子さんは、ねえさんの顔へ光をあてました。ねえさんは、

「おお、まぶかしい。」

と、いって、手で顔をかくしました。さうして、

「いたづらな花子さんね。」

と、いって、笑ひました。

をんどり

勇さんが、えんがはで、鏡を持って遊んでみました。そこへ、勇さんによくなれたをんどりが、急さでももらへるのかと思つて、やつて來ました。

勇さんは、をんどりに鏡を見せました。

をんどりは、ちよつとおどろいて、逃げださうとしましたが、急にひきかへして、鏡の方へよつて來ました。

をんどりは、首の毛をさか立てて、鏡にうつる自

分のかげをめぐけて、とびついて來ます。鏡の中のをんどりも、首の毛をさか立ててゐます。



「おや、自分のかげを、ほかのをんどりと思つてゐるのだな。」
と、勇さんは思ひました。

をんどりは、カいっぱい鏡をくちばしでつつきま

す。

たいへんなけんくわになりました。

勇さんは、かはいさうになつて、鏡をひっこめました。すると、をんどりは、元氣よく羽ばたきをしながら、

「こけこっこう。」

と聲高く歌ひました。

おかあさん

昔、孝行な娘がありました。おかあさんが、長い

間病氣でねてゐましたので、晝も夜も、一心にか
いはうしましたが、病氣はわるくなるばかりでし
た。

ある日、おかあさんは娘をそばへ呼んで、何か包
んだ物をわたしました。

「これをおまへにあげるから、だいにしまつて
おおきなさい。もし、おかあさんにあひたかつた
ら、これをあけてごらんなさい。」

と、いつて、おかあさんは、まもなくなくなつてしま
ひました。

娘は泣いて悲しみましたが、しかたがありません。
それから、おとうさんと二人で、さびしくくら
してゐました。

娘は、ふと、おかあさんのくださつた物のことを
思ひ出しました。そつと一間へはいつて、包をあけ
て見ますと、中から出たのは、一枚の鏡でした。

まだ、鏡といふものが、めつたにないころのこ
とでしたから、娘には、それが何であるかわかりま

せんでした。

そつとのぞいて見ると、女の顔がうつつてみま
す。子どものやうですが、なく
なつたおかあさんにそつくり
でした。娘は思はず、

「おかあさん。」

と、いって、鏡をだきしめました。



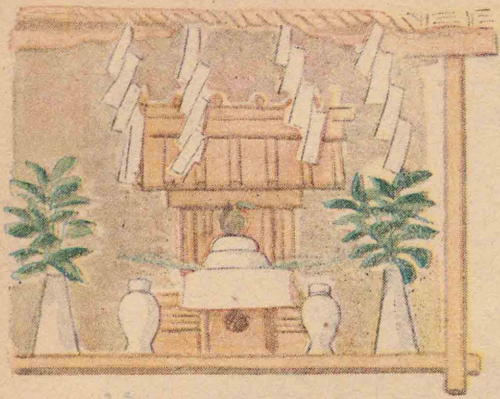
十二 神だな

もうすぐお正月なので、おぢいさんは、神だなを

おかざりになりました。

新しいしめなはをはったり、さ
かきをあげたりなさいました。

小さい三方に、白い紙と、うら白
をしいて、鏡餅をのせてお供へに
なりました。おみきもお供へにな



りました。

それから、おざしきの床の間にも、鏡餅をおかざり
になりました。

おぢいさんは、

「さあ、これでいつお正月が来てもいいぞ。」

とおっしゃいました。

夕方、神だなにあかりをあげて、みんなで拜みま
した。

小さい弟が、

「神さま、お喜びね。」

といひました。

新しいしめなは、白い紙、うら白の葉、何もかも
さっぱりときれいに見えて、もうお正月になった
やうな気がしました。

十三 新年

門松立てて、しめかざりして、
うち中そろって、

新年 おめでたうございます。

お宮へまゐって、學校へ行つて、

「君が代」歌つて、

新年 おめでたうございます。

たこあげしたり、羽つきしたり、

みんなにここにこ、

新年 おめでたうございます。

書きぞめの字は「昭和の光」

上手にできて、

新年 おめでたうございます。

十四 いうびん

今まで、羽をついて、また花子さんと春枝さんは、
こんどは、いうびんごっこをすることにしました。

花子さんは、弟の一郎さんを呼んで、來ました。一

郎さんは喜んで、赤い紙を小さく切って、切手をこしらへました。

春枝さんは、はがきとふうとうをこしらへました。

花子さんは、おかあさんから大きな紙の箱をいただいて来て、ポストをこしらへました。

花子さんと春枝さんは、えんがはで、両方に分れてすわりました。一郎さんは、まん



中にポストをおいて、そのそばにすわりました。花子さんと春枝さんは、だまって何か書きはじめました。

その間に、一郎さんは、かばんを取りに行きました。一郎さんが、もとのところへかへって来ますと、ポストの中には、もう二枚のはがきがはいってありました。一郎さんは、それをかばんに入れて、くばりに出しました。

「すず木さん。」

と いった、一枚を花子さんにわたしました。

「林さん。」

と いった、一枚を春枝さんにわたしました。

花子さんは、にこにこして読みました。

「新年 おめでたうございませす。」

春枝さんも、受け取ったはがきを讀んでみませすと、やっぱり、

「新年 おめでたうございませす。」

と書いてありました。

「あら、おんなじですな。」

と いった、二人とも笑ひました。

一郎さんが大きな聲で、

「もうありませんか。あつたら

早く出して ください。」

と いひました。

花子さんは、

「こんどは、私が先に書きます。」

から、春枝さん、ごへんじを ください。」



と、いって、手紙を書きました。さうして、一郎さんのところへ持って行って、

「五錢の切手を一枚ください。」
と、いひました。

一郎さんが切手をわたしますと、花子さんはそれを
はってポストへ入れました。

一郎さんは、その手紙を春枝さんのところへ持
って行って、

「林さん。」

と、いって、わたしました。

春枝さんがあけて見ますと、

「あしたから、学校が始りますが、またいつしよに
行きます。朝さそってください。」

と書いてありました。

春枝さんは、

「お手紙をくださって、ありがたうございます。あ
したの朝きつとおさそひしますから、待って
てください。」

と書いて、切手をはってポストへ入れました。

十五 にいさんの入營



青年學校の服を着て、赤いたすきをかけたにいさんは、しんるゐの人たちに送られて、兵營の門まで来ました。

にいさんは、ここでみんなにあいさつをして、門の中へはいりま

した。おとうさんと私もはいりました。

門をはいると、急い兵所に、兵たいさんが七八人腰をかけてゐました。

廣い庭の中ほどには、何本も立札が立ててありました。

にいさんは、兵たいさんにあんないされて、そちらへ行きました。にいさんと同じやうな人が、たくさんゐました。

金すぢの えりしやうをつけた兵たいさんが来て、

名を呼び始めました。だんだん呼んでいって、

「山田武。」

と、にいさんの名を呼びました。にいさんは大きな
聲で、

「はい。」

と答へました。私は、なんだか、自分が呼ばれたやう
に思ひました。

廣い庭の向かふに 兵舎が立ってゐます。そこ
へにいさんたちは行きました。

おとうさんと私は、つきそひの人たちの休むと
ころで待ってゐました。馬に乗った軍人さんが、
門をはいって来ると、急い兵所にある兵たいさん
が、

「けい禮。」

と元氣な聲でいって、立ちあがってけい禮をしま
した。

まもなく、新しい軍服を着た一人の兵たいさん
が、私たちのところへ来ました。見ると、それがに

いさん でした。見
ちがへるほどりっ
ぱな兵たいさん
になって、めたので、



私はびっくりしま
した。にいさんは、
「おとうさん、お待たせしました。國男、これはにい
さんが着て、めた服だ。おまへ持ってかへっ
ておくれ。」

と、いって、ふるしき包みをわたしました。
にいさんの赤い えりしゃうには、星が一つついで
てみました。おとうさんはにこにこして、
「りっぱな兵たいさんだな。これなら、ごほうこう
もできよう。しつかりたのむよ。」
とおっしゃいました。

十六 雪の日

ちら ちら ちらと

雪がふる。
すずめ親子の
ものがたり。

「山は大雪、
日はくれる。
鳥が急いで
かへったよ。」



鳥のかん太は
寒からう。
さ、やすまうよ。」と
親すずめ。

「やすみませう。」と
子すずめが、
「今夜はだいぶ
つもるでせう。」



すずめ親子の

ねたあとは、

さらさらさらど

雪の音。

十七 白兔

白兔が、島から 向かふの 陸へ 行って みたいと思
ひました。

ある日、はまへへ 出て 見ると、わにぎめが ありま
したので、これは よいと思つて、

「きみの 仲間と ぼくの 仲間と、どっちが多いか、く
らべて みようではないか。」

と いひました。わにぎめは、

「それは おもしろからう。」

と いて、すぐに 仲間を 大勢 つれて 来ました。白
兔は それを見て、

「きみの 仲間は ずるぶん 多いな。ぼくらの方が

負けるかもしれない。
ぼくが、きみらの
せなかの上を、か
ぞへながら とんで
行くから、向かふの
陸まで 並んでみ
たまへ。」

といひました。

わにぎめは、白兔の
いふ とほりに 並び
ました。白兔は、「一
つ、二つ、三つ、四つ、
とかぞへながら、渡
って行きました。も
う、一足で 陸へ あ
がらうといふ時、白兔は、

「きみらはうまく だまされたな。ぼくは、ここへ 渡
って来たかったのだ。あははは。」



と、いって、笑ひました。

わにぎめはそれを聞くと、たいそうおこりました。おしまひに、あた、わにぎめが、白兔をつかまへて、からだの毛をみんなむしり取って、しまひました。

白兔は痛くてたまりません、はまべで、しくしく泣いて、みました。その時、大勢の神様がお通りになつて、

「おまへ、なぜ泣いて、みるのか。」

とおたづねになりました。白兔が、今までのことを申しますと、神様は、

「それなら、海の水をあびて、ねて、みるがよい。」とおっしゃいました。

白兔は、すぐ海の水をあびました。すると、痛みが、いっそうひどくなつて、どうにもたまらなくなりました。

そこへ、大國主神といふ神様がおいでになりました。このかたは、さきほどお通りになつた神様が、たの弟さんです。兄様がたの重い、ふくろを、せ

おつていらつしゃったので、おそくおなりになつたのです。



この大國主神も、
「おまへ、なぜ泣いてゐるのか。」
とおたづねになりました。
白兔は泣きながら、また今までのことを申しました。大國主神は、

「かはいさうに、早く川の水でからだを洗つて、がまのほをしいて、その上にころがるがよい。」とおつしゃいました。

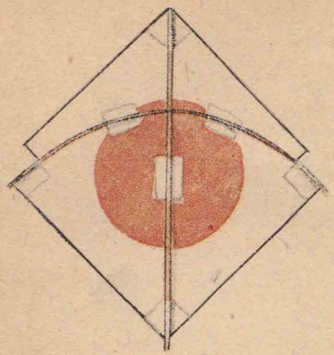
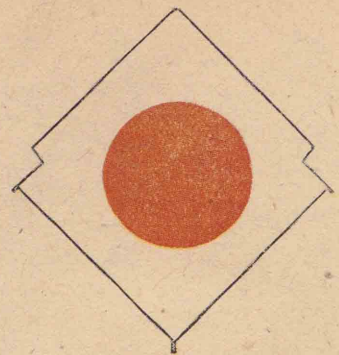
白兔がそのとほりにしますと、からだは、すぐもとのやうになりました。喜んで大國主神に、
「おかげですつかりなほりました。あなたは、おなさせ深いおかたですから、今は重いふくろをせおつていらつしゃつても、のちにはきつとおしあはせにおなりでせう。」

と申しました。

十八 たこあげ

をぢさん、この間作っていただいたたこを、今日あげてみました。ほんたうによくあがりました。

あの日から、毎日雪が降ったり雨が降ったりして、あげられなかったのですが、今日はよいお天気でした。それに日曜なので、朝からあげて遊びました。



あのたこを、次郎と二人で外へ持って出た時は、みんなが、「へんなたこだ。」といって、笑ひました。こんなたこは、今までだれも見たことがないのでせう。口わるの三ちゃんは、

「なんだ、骨が二本しかないぢやないか。こんなものがあがるものか。」

といひました。ぼくはだまってる

ました。

みんな、めいめいのたこをあげてゐます。

次郎にたこを持たせ、ぼくは糸を少しのばして、風に向かつて走りましました。たこはすつとあがりましました。けれども、空で二三べんまはって、落ちてしまひました。

「やあい。」

どいったのは、やはり三ちゃんだったやうです。

をちさんに教へていただいたやうに、たこの糸めをなほして、下糸を少しつめました。今度はあがりましました。十メートルばかり糸を出して、かげんを見てゐますと、たこは左の方へかたむきます。それでまたおろして、たこの右のかたへ、紙のテープをつけました。

三度めにあげた時は、たこはまっすぐにあがりましました。ちやうどよい風が吹いて来て、糸をのばすとぐんぐんあがります。四五十メートルのばした時は、だれのたこよりも高くあがつてゐまし

た。次郎は喜んで、

「ばんざい。」

といひました。

ぼくは糸をどんどん

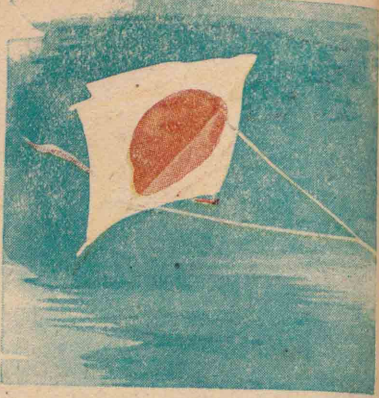
くり出しました。みんな

が、

「わあっ。」

といひました。

とうとう、百五十メートルの糸をみんな出しまし



たこは、高い空に小さく見えて、すわったやうに動きません。

みんながぼくらのそばへ来て、

「よくあがってゐるな。」

「ちよつと糸を持たせてくれたまへ。」

「よく引っぱってあるな」
などといひます。

ぼくも次郎も、うれしくてうれしくてたまりませ
ん。このよくあがったところを、をぢさんに見せ
てあげたいと思ひました。

十九 豆まき

今日は節分で、豆まきの日です。

「太郎、今年からおまへがまくのだ。」

と、おとうさんがおっしゃいました。

おかあさんは、豆をたくさんいってますに入れ、
神だなお供へになりました。ぼくは、早く 晩に
なればよいと思ひました。

だんだんうすぐらくなると、あちらでもこちらで
も、豆まきの聲が聞えます。おとうさんが、

「うちでもそろそろ始めるかね。」

とおっしゃって、神だなから、ますをおろしてくだ
さいました。

ぼくは、少しきまりがわるかったが、思ひきって、
 「福は内、鬼は外。」
 と聲をはりあげて、豆をまきました。方々のへや
 をまいて歩くと、妹や
 弟があとからついて
 来て、「きやつ、きやつ。」
 と大きわぎを
 して、豆を拾ひ
 ました。



ぼくもおもしろくなつて、だんだん大きな聲を出しながら、豆をまきました。そのうち
 ちにうっかりして、「鬼は内、福は外。」といつたので、みんなが笑ひました。
 しまひにえんがはへ出て、「鬼は外、鬼は外。」と



いひながら、豆を庭へ向かって元氣よくまきます
と、おかあさんが雨戸をぴしゃりと、おしめになり
ました。

それから、みんなで豆を年の数だけたべました。

二十 金しくんしゃう



軍人さんの胸は、

くんしゃうでいっぱいです。

花のやうなくんしゃう。

日の丸のやうなくんしゃう。

金のとびの金しくんしゃう。

昔、神武天皇のお弓に止った

あの金のとびが、

今、軍人さんの胸にかがやいて、

りっぱなてがらを

あらはしてゐるのです。

二十一 病院の兵たいさん

この前の日曜日に、兵たいさんの病院へ、みもんに行きました。戦争できずを受けたり、病氣になつたりした兵たいさんが、大勢いらつしゃいました。そのかたがたへ、花をさしあげました。それから、學校のことや、うちのことなど、いろいろお話しました。

兵たいさんたちは、たいそう喜んでくださいました。私は、また、きつとお見まひにまゐりますといつて、かへりました。

四五日たつて、兵たいさんから、お手紙がまゐりました。

この間は、お見まひくださつてありがたう。あなたがたのやうな子どもさんが、みもんに来てくださると、私



たちは、ほんたうにうれしいのです。あなたのいらっ
しゃった時は、少しきずが痛んでおりましたが、あなた
のお話がおもしろかったので、痛みも忘れるほどで
した。

きれいな花を、わざわざ持って来てくださって、あり
がたう。あの花が、私の枕もとで、今もまだ咲いてお
ます。枯らしてはたいへんだと思って、毎朝、水をと
りかへておます。

この次には、何か、おもんびんを持って来てくださる
とのことでしたが、そんなしんぱいをしてしないでくだ
さい。あなたが来て、お話をしてくださるのが、
何よりもうれしいのです。その代り、今度は、この前
のやうに、はづかしがらないで、ぜひ、いうぎをして
見せてください。

あれから、きずもだんだん痛まなくなりました。こ
の次におあひする時には、戦争のことや、支那の子ど
ものお話をしあげませう。

二十二 支那の子ども

ここは、支那のある町です。

せまい通には、赤いらふそくや、にはどりの卵や、あひるの卵や、にんにくや、はすの實などを、戸口に並べてある店があります。のき先に、大きなぶたの肉をぶらさげ、大きなはうちやうで、一きれ一きれ



切り取って、賣ってある店もあります。

今、日本の兵たいさんが、車にいったい荷物をつんで、この通にさしかかりました。町の男や女たちが、兵たいさんに、ていねいにあいさつします。何かわからぬことを、がやがや話したり、にこにこ笑ったりしながら、立ち止って、兵たいさんを見てゐるものもあります。このせまい通には、買物をする人たちがたくさんゐるので、兵たいさんは、車を引きながら、ときどき、「ちよつとごめんよ。」

といひます。すると、みんなは、すぐよけて兵たいさんを通らせます。

通をぬけて、町の入口の門のところまで來ますと、そこには、日本の兵たいさんが、銃を持って番をしてゐます。車を引いてゐる兵たいさんが、けい禮をします。口にはいひませんが、おたがひに、

「ごくろうさま。」

「ごくろうさま。」

と、心の中でいつてゐるにちがひありません。

門を過ぎると、廣場があります。そこで遊んでゐる支那の子どもたちが、車を引いてゐる兵たいさんを見ると、

「兵たいさん。」

「兵たいさん。」

といつて、やって來ました。

子どもたちは、ちゃんと、「兵たいさん」といふ日本語を、おぼえてゐるのです。でも、そのあとは、がやがや何かわからないことをいひながら、三四人は、車のかち



棒にとりつきます。おくれて来た二人は、車のあと押しをします。みんな一生けんめいです。

かうして、たくさんの支那の子どもたちに手つだはれながら、日本の兵たいさんは、にこにこして車を引いて行きます。

すると、とつぜん一人の子どもが、
大きな聲で、

青空高く

日の丸あげて、

と歌ひだしました。それについて、子どもたちは聲をそろへて歌ひました。

青空高く

日の丸あげて、

ああ、美しい、

日本の旗は。

二十三 おひな様



春が来ました、おひな様。
さあさ、かぎってあげませう。

まあ、お久しい、だいら様。
あなたはいちばん上の段。

赤いはかまの官女さん、
三人並んで次の段。

笛やたいこでにぎやかな
五人ばやしは三の段。

かざればみんなにこにこと、
おうれしさうなおひな様。

あられ、ひし餅、桃の花、
なたねの花も供へませう。

二十四 北風と南風

北風と南風は、たいそう仲がわるいやうです。

冬の間は、寒い北風が、びゅうびゅうと吹きまはって、
雪やあられを降らせたり、水をこぼら
せたりします。



しかし、北風が少し
ゆだんをしてみると、

暖い南風が、そつとやって來ます。さ
うして、北風の作った雪の山や、氷の池
を、少しでもかさうとします。する
と、北風は、すぐ南風を追ひはらひます。
こんなことを、何べんもくりかへし



てあるうちに、冬が終に近づきます。今までは、うとうと眠つて、弱い光を出してゐたお日様が、目をさまして、暖い光を送るやうになります。

かうなつて來ると、南風は、もう前のやうに負けてばかりはあません。

「北風、おまへは、もう北の國へかへつてしまへ。」と、南風がいひます。すると、北風は、

「なあに、まだおまへの出て來る時ではない。わたしは、もう一度おまへを追ひはらつて、野や山をまっ白にしてやる。」

と答へます。さうして、ありつたけの力を出して、南風を追ひたてます。野や山が、また、雪でまっ白になります。

しかし、南風は、すぐに元氣をとりかへします。南の國から、大勢の仲間をつれて來て、北風をどしどしと追ひまくりまします。雪でも氷でも、かたはしからと



かして、野や山を暖くします。暖い雨を、何べんか降らせ
ます。すると、草や木が、だんだんと芽をふき、花のつ
ぼみがふくらんで來ます。

南風はいひます。

「北風が、雪や氷で、野山をまっ白にした代りに、わた
しは、赤い花や、みどりの若草で、野山をかざって見
せよう。」

二十五 羽衣

白いはまへの

松原に、

波がよつたり、

かへつたり。

かもめすいすい

とんで行く、

空にかすんだ

富士の山。



一人の漁夫が、みほの松原へ出て來ます。

漁夫「今日は、よいお天氣だ。なんとまあ、よいけしきだらう。」

けしきに見とれながら歩いてゐますと、どこからか、よいにほひがして來ます。見ると、向かふの松の枝に、きれいな物がかかつてゐます。

漁夫「あれは何だらう。」

漁夫は、そばへよってよく見ます。

漁夫「着物だな。こんなきれいな着物は、見たことがない。

持ってかへって、うちのたからにしよう。」

漁夫は、その着物を取って、持って行かうとします。

松の木の後から、一人の女が出て來ます。

女「もし、それは私の着物でございしますが、どうなさるのでございますか。」

漁夫「いや、これは私が拾つたのです。持ってかへって、うちのたからにしようと思ひます。」

女「それは、天人の羽衣と申しまして、あなたがたにはご用のない物でございます。どうぞ、お返しくだ

さいませ。」

漁夫「天人の羽衣なら、なほさらお返しはできません。この國のたからにいたします。」

天人「それがないと、天へかへることができません。どうぞ、お返しくださいませ。」

漁夫「いや、返されません。」

天人は、悲しきような顔をして、じつと空を見あげます。天人のしをれたやうすを見て、

漁夫「おきのどくですから、羽衣をお返しいたしませう。」

天人「それは、ありがたうございます。では、こちらへいただきませう。」

漁夫「お待ちください。天人のまひを、まっで見せていただけませんか。」

天人「それでは、お禮にまひませう。でも、その羽衣がないと、まふことができません。」

漁夫「といって、羽衣をお返ししたら、あなたは、まはずにかへっておしまひになるでせう。」

天人「天人は、うそといふものを知りません。」

漁夫「ああ、これは、はづかしいことを申しました。」

漁夫は羽衣を返します。天人は、それを着て、静かにまひます。



天人「月の都の天人たちは、

みんなそろってまひ上手。

黒い衣のそろひでまふと、

月はまっ黒やみの夜。」

白い衣のそろひでまふと、

月は十五夜まんまるい。」

天人は、まひながら、だんだん天へのぼって行きます。

右に、左に

ひらひらと、

ゆれるたもどが

美しい。

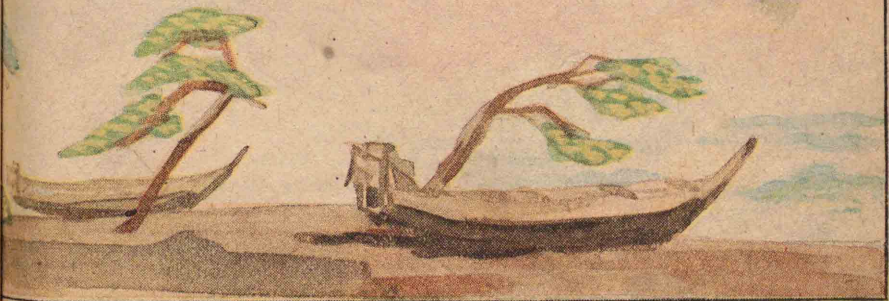


白いはまべの
松原に、
波がよつたり、
かへつたり。

いつのまにやら
天人は、
春のかすみ

つつまれて、

かもめすいすい
とんで行く、
空にほんのり、
富士の山。



暖 (113)	卯 (104)	度 (91)	兔 (80)	和 (65)	棒 (52)	洲 (44)	迎 (36)	陞 (26)	徒 (19)	麥 (13)	富 (4)
終 (114)	肉 (104)	福 (96)	陸 (80)	錢 (70)	鏡 (53)	島 (44)	別 (36)	線 (28)	友 (21)	豆 (13)	士 (4)
眠 (114)	荷 (105)	內 (96)	仲 (81)	始 (71)	受 (54)	匹 (44)	安 (37)	意 (28)	元 (22)	讀 (13)	平 (5)
弱 (114)	銃 (106)	鬼 (96)	多 (81)	營 (72)	窓 (54)	岩 (44)	申 (37)	聲 (28)	結 (22)	頭 (14)	洋 (5)
芽 (116)	過 (107)	拾 (96)	渡 (83)	服 (72)	毛 (55)	寒 (48)	守 (38)	追 (29)	席 (23)	黑 (14)	世 (5)
衣 (116)	語 (107)	數 (98)	樣 (84)	着 (72)	孝 (57)	羽 (48)	弓 (38)	負 (29)	腰 (23)	字 (17)	界 (5)
漁 (118)	押 (108)	胸 (98)	主 (85)	所 (73)	娘 (57)	指 (49)	番 (39)	育 (33)	征 (24)	書 (17)	勢 (6)
夫 (118)	久 (111)	院 (100)	兄 (85)	札 (73)	物 (58)	畫 (49)	恩 (41)	嫁 (34)	孫 (24)	帝 (17)	午 (7)
返 (119)	段 (111)	爭 (100)	降 (88)	武 (74)	餅 (61)	包 (50)	腹 (42)	晚 (35)	菊 (26)	加 (18)	困 (7)
靜 (122)	官 (111)	枕 (102)	骨 (89)	舍 (74)	供 (61)	住 (51)	打 (42)	眺 (35)	治 (26)	賀 (18)	半 (7)
	笛 (111)	支 (103)	系 (90)	休 (75)	床 (62)	場 (52)	親 (42)	泣 (35)	節 (26)	合 (19)	集 (10)
	桃 (112)	那 (103)	教 (90)	烏 (78)	昭 (65)	細 (52)	滿 (44)	悲 (36)	皇 (26)	稻 (19)	名 (12)

昭和十七年七月九日
文部省檢査日



發行所

東京書籍株式會社

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

兼翻
印刷
者

東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

著作權所有

發行者兼

文部省

昭和十七年七月十八日
昭和十七年七月十八日
昭和十七年七月十八日

修正印刷
修正印刷
修正印刷

よみかた四

定價金拾九錢

